

## パンデミックの社会言語学

[あとがき]

パンデミックと  
〈ことば〉

触媒か断絶か

佐野直子

さの・なおこ

## 0. 祭りのあとで

2021年夏、コロナ・パンデミックの影響で一年延長になったオリンピックが開催された。世界の選手や観光客との多言語的交流も幻に終わり、開閉会式をはじめ、全ての種目がほぼ無観客で実施されるという、前代未聞の方法となった。生身の人間がその身体性をもって他者（の身体）と対峙するスポーツが、観客という当事者の参加を排除したまま、画面の向こうにあるコンテンツとして粛々と放送され、録画された。

ただし、「画面の向こうにある、再生・編集可能なコンテンツ」としてのスポーツ観戦は、何も今回のオリンピックに始まったことではなく、とうの昔から起きていたことではあった。その場に居合わせることのかけがえのなさよりも、場合によっては秒単位の動画に切り取られ、それをネット上にアップしてそこにどんどんコメントを積み重ねていくような楽しみ方が、すでに確立していた。「緊急事態宣言」下の都市での国際スポーツイベント開催に伴うあらゆる混乱は、確かに異様な光景ではあったが、パンデミックという断絶によって新たに現れた何かというよりは、すでにとっくに進行していた何かを端的に顕示してしまう機会であったにすぎない。

## 1. 〈ことば〉の媒体の変容、認識の変容

生身の人間の身体性をもって他者と対峙し交流する、もう一つの様態である〈ことば〉(langage, 人間の言語活動全般)もまた、とうの昔に、その一回性——その時その場においてだけ対話者や参与者と共有する、かけがえのない出来事・経験——の感覚を失っている。それは人間が文字という媒体を開発した時点ですでに始まっていた。参与者の身体性や出来事としての一回性から切り離され、時空を超えて通信・保存可能な文字媒体の誕生は、人間の認識や思考のあり方、社会様式をも完全に変容させた(Ong 1982)。文字を知ってしまった社会は、文字以前の社会を想像することも難しくなる。そこには明らかに断絶がある。

文字は記録・保存・複製・再生可能な媒体として君臨しつづけ、書記言語を基盤として近代社会は組み立てられた。それは今も変わらない。しかし、新たな媒体の開発は、その都度、新たな〈ことば〉の様態や、〈ことば〉への認識の変容を生み出している。19世紀後半に現れた録音装置は、文字の力には及ばなかったとはいえ、やはり〈ことば〉への視点やその研究の手法を大きく変えた。すなわち、「あらゆる言語の録音サンプルの蒐集」(de Saussure 1916: 44)に基づき、聴覚によってとらえられる記号を文字化することで成立する、顛倒した音声中心主義に基づく記述言語学の誕生である。一方、録音装置とそれほど時間を経ずに誕生した録画装置は、やや意外なことに、その時点では〈ことば〉への視点や研究に大きく影響することはなかった。むしろこの二つの記録媒体が別々に開発されたことで、〈ことば〉における場面・状況や表情などが音声記号体系と切り離され、「自立した言語体系」という認識を強める方向へと導いたようにも思われる。

しかし20世紀末、そして21世紀になると、記録媒体はさらなる進化を見せる。〈ことば〉の参与者たちが空間を共有せず同時に双方向性を確保し、しかも保存・再生・複製、さらには編集・加工が極めて簡単なデジタル記録媒体の誕生による「デジタル・トランスフォーメーション」が起きた(ハインリッヒ・山下序論)。文字媒体は、メールやSNSとして「いつでもどこでもつながる」を実現し、そのやりとりをそのまま記録として残すことが可能である(LINEなどはタイムラインとしては流れ去っていても、スクショすること